

血液培養から検出された

*Streptobacillus moniliformis*による鼠咬症の1例

○面すみれ 秋葉容子 駿河洋介 梶原裕貴

(千葉市立青葉病院 臨床検査科)

【はじめに】*Streptobacillus moniliformis*は、鼠などの齧歯類の口腔内に常在する通性嫌気性のグラム陰性桿菌で鼠咬症の原因となる。鼠咬症は、人獣共通感染症で発熱、嘔吐、関節痛などの症状を認め、心内膜炎、髄膜炎などを併発する場合がある。今回我々は、血液培養から検出された *S. moniliformis* による鼠咬症の1例を経験したので報告する。

【症例】79歳、男性。2012年11月12日頃から嘔吐、発熱を認め、頸部痛、背部痛、関節痛が出現したため当院紹介入院となった。入院時の血液検査所見はWBC 12,800/ μ L、CRP 25.1mg/dL。11月5日に右第5指を鼠に噛まれていたことから当初はレプトスピラ症が疑われていたが、血液培養より *S. moniliformis* が検出され鼠咬症と診断された。CTX、ABPC、MINO投与により症状の改善を認め、入院23日目に軽快退院となった。

【微生物学的検査】血液培養より菌体が長いフィラメント状に連なるグラム陰性桿菌が確認され、35℃、7%CO₂環境下にて培養2日後、血液寒天培地上に微小な淡白色のコロニーが検出された。生化学的性状及び16S rRNA塩基配列解析より、*S. moniliformis*と同定された。薬剤感受性検査はディスク法(馬血清添加MH培地使用)にて実施し、 β -ラクタム系薬に良好な感受性を示した。

【考察】鼠咬症はまれな疾患ではあるが、国内のドブネズミ・クマネズミは高率に口腔内に保菌している。早期診断には齧歯類との接触歴や臨床症状に加え、フィラメント状を示す菌体の特徴から本菌による感染を疑うことも有用であると思われる。今回、菌株の解析をして頂きました国立感染症研究所獣医科学部 今岡浩一先生、木村昌伸先生に深謝いたします。

043-227-1131 (内線 2232)